

# 就学移行期の発達障害児の園適応と養育レジリエンス

－ 年長時期に焦点を当てた検討 －

○石川 菜津美

（東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部／筑波大学 人間総合科学学術院）

KEY WORDS: 就学移行 園適応感 養育レジリエンス

## 問題の背景・目的

幼稚園や保育所、認定こども園（以下、園）から小学校に移行する就学移行期は、子どもの発達の転換点であるため、多くの児童が学校適応の課題を抱えやすい。例えば、令和元年度の不登校の児童数は小学 1 年生で 2,744 名と 5 年前の約 2 倍に及ぶ（文部科学省,2020）ことから、幼児期から小学校への円滑な接続は喫緊の課題である。特に、対人的・環境的变化の影響を受けやすい発達障害児は、就学直後から精神的・身体的不調の訴えや感情制御の難しさなど、多くの課題が表面化しやすい（Nuske et al., 2019）。昨今のインクルーシブ教育推進の流れを考慮すると、児童の不登校や行動問題を早期に予防するためには、幼児期から適応を促進するシステムづくりが急務である。しかし、就学前の年長期の発達障害児を対象に、行動問題や園適応感を評価した研究はほとんどない。また、就学移行期は学校選択等で保護者の負担が増大すると考えられるが、保護者がどのように課題に対応し、変化に適応していくのか、評価した研究は見当たらない。そこで本研究では、年長の発達障害児を対象に、就学移行期の行動問題や園適応感、保護者の養育レジリエンスにどのような特徴があるのか、一般的な園に通園する年長児との比較によって検討する。

## 方法

**研究対象者：**年長クラスに在籍する幼児を対象に調査を依頼し、保護者 302 名（母親 282 名、父親 18 名、祖母 2 名）から回答を得た。そのうち、児童発達支援事業所に通所する年長児の保護者（以下、療育群）が 214 名、園に通園する年長児の保護者（以下、園群）が 88 名だった。性別は、男児 208 名、女児 94 名だった。

**調査内容：**質問紙は以下の内容で構成した。

### (1) Autism Spectrum Screening Questionnaire

自閉スペクトラム症のスクリーニング尺度として開発され、日本語版は伊藤ら（2014）によって信頼性やカットオフ値が示されている。本研究では伊藤ら（2014）が開発した 11 項目の短縮版を使用した。

### (2) 養育レジリエンス要素質問票 (PREQ)

鈴木・稲垣（2017）が開発した尺度で、発達障害児を養育する保護者がどの程度養育レジリエンスの要素を持っているのか、3 因子 16 項目で測定する。

### (3) Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ)

Goodman（1997）が開発した尺度で、子どもの向社会的行動や不適応行動を測定する 5 因子 25 項目で構成される。

### (4) 保護者からみた園適応感

独自作成の尺度で、「子どもは、園が気に入っている」など保護者が認識する子どもの園への適応感を尋ねる 3 因子 13 項目で構成される。幼稚園に通う 3 歳児～5 歳児クラスで実施した予備調査の結果、因子構造や信頼性、妥当性が確認されている。

**手続き：**本研究は 2020 年に開始した縦断的調査「幼小間の就学移行期における親子の関わりと支援状況に関する調査」の一環として実施した。9 都道府県の園・児童発達支援事業所に調査用紙の配布を依頼し、担当者から手渡しで保

護者に配布するよう依頼した。研究対象者には、調査への協力は任意であり、回答しないことによる研究対象者の不利益は発生しないことを、説明文書を用いて教示した。

**統計解析：**SPSS Statistics 26（International Business Machines 社）を使用した。

**倫理的配慮：**本研究は東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会で審査・承認を受けて実施した。

## 結果と考察

研究対象者に療育等福祉サービスの利用頻度を尋ねたところ、療育群の通所頻度は、週 1、2 日が 96 名（32%）と最も多かった。次いで月 1～3 日が 47 名（16%）、週 3、4 日が 41 名（14%）、週 5 以上が 23 名（8%）、通所なしが 6 名（2%）、その他 1 名だった。園群で月 1 回以上通所していると回答した者が 12 名、通所なしが 76 名（86%）だった。以降の分析からは療育群で「通所なし」と回答した 6 名、園群で療育等福祉サービスを利用している 12 名を除外した。年長時の療育等福祉サービスの通所有無と「保護者からみた園適応感」「SDQ」「PREQ」との関連を検討するために t 検定を行ったところ、PREQ の「社会的支援」、SDQ の「情緒の問題」「多動／不注意」「仲間関係の問題」「向社会的行動」、保護者からみた園適応感尺度の 3 つの下位尺度で有意差が示された。本研究の結果から、一般園に通園する幼児と比べて、発達障害児は年長期に行動問題が生じやすく、園適応感に課題があると保護者が認識していることが明らかになった。加えて、保護者は社会的支援が十分であると感じていないことが示されたことから、就学に向けて年長期の親子をサポートするための仕組みづくりが必要である。

Table 1. 療育への通所有無による t 検定

	療育群		園群		df	t 値	r
	M	SD	M	SD			
PREQ							
子どもの特徴に関する知識	5.36	0.65	5.34	0.67	282	-0.24	.01
社会的支援	5.18	1.04	6.02	0.82	282	6.34 *	.35
肯定的な捉え方	5.77	0.92	6.10	0.80	282	2.70	.16
SDQ							
情緒の問題	1.55	0.45	1.29	0.33	282	-4.59 **	.26
行為の問題	1.49	0.33	1.33	0.28	282	-3.85	.22
多動／不注意	2.19	0.50	1.50	0.37	282	-10.89 **	.54
仲間関係の問題	1.68	0.43	1.33	0.28	282	-6.66 **	.37
向社会的行動	2.07	0.52	2.36	0.39	282	4.52 **	.26
保護者からみた園適応感							
園への肯定的感情	3.95	0.71	4.49	0.56	282	5.95 **	.33
園生活の安定	3.65	0.74	4.41	0.50	282	8.33 **	.44
園・先生への親しみ	3.46	0.91	4.16	0.67	282	6.13 **	.34

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## 文献

Nuske, J., ... & Smith, T. (2019). Broken bridges -new school transitions for students with autism spectrum disorder: A systematic review on difficulties and strategies for success. *Autism*, **23**, 306-325.

鈴木浩太・稲垣真澄（2017）. 発達障害児（者）をもつ養育者のレジリエンス：尺度の開発と適用について. 精神保健研究, **30**, 63-71. (ISHIKAWA, Natsumi)